

張 嵐

株式会社オーグス総研

技術部

茨木 良昭

株式会社オーグス総研

技術部

オフショア開発における アジャイル開発の取り組みと評価

講演概要

本発表は、オフショア開発へのアジャイル開発導入に関する取り組みを説明し、アジャイル開発プロジェクトを評価するためのメトリクスを選定し、定量的な結果を示し、定性的な効果を紹介する。

アジャイル開発は、欧米のソフトウェア開発の現場で広く適用されている（※2）。日本のソフトウェア開発業界では、WEBサイト開発やゲーム開発など、ビジネスや技術の変化へのすばやい対応が要求されている領域でのアジャイル開発への移行が進んでいる一方、SIerの領域では、組織の体質や多階層の請負契約による開発体制といった業界の慣行に、アジャイル開発が前提とする開発のやり方がなじみにくく、その事例は依然として小規模案件にとどまる傾向がある。当社は、90年代から大規模反復の開発を実践してきた。2011年からは開発方法、測定や契約を含む体系である「OGIS Scalable Agile Method (OSAM)」を社内の開発プロジェクトに適用・推進している。（※3）

オフショア開発については、「グローバルデリバリ」の動き下で、当社は2007年10月に、日中合併の形で上海欧計斯軟件有限公司（SOT）を設立し、グローバル事業展開の一環として上海にオフショア開発拠点を持つに至った。設立以来の数年間で、オフショア開発プロセスの整備や、開発経験の蓄積によって、当社同様にコスト削減の効果を上げている（※1）。しかし、国内のパートナー企業との協力と比べ、仕様に関する説明、合意の形成、詳細な仕様書の作成、現地出張の費用、品質管理/トラブルの対応、進捗管理/遅延の対応コストなどは、依然大きな課題のままである。これらのコスト増加の要因の低減を目的として、当社はオフショア開発へのアジャイル開発の導入を試みた。

要求の主導権の観点から分類すると、SOTでは、以下2種類の受託開発を行っている。

1. 当社の要求を満たすための開発
2. 当社の顧客の要求を満たすための開発

上記2の開発に関しては、日本で上流設計を行い、中国に詳細設計～結合テストの工程を発注、日本で成果物を受け入れ、システムテストを実施するという典型的なオフショア開発である。上記1の開発に関しては、当社の社内システムの開発やパッケージ開発になるが、当社が推進しているOSAMの一部を導入した。具体的に開発手法はScrumを導入し、技術的なプラクティスとアジャイル開発をサポートするツールを開発に導入した。

アジャイル開発の導入結果に関し、定量的なプロジェクトのデータを収集した。また、現地で関係者が一堂に会してのプロジェクト振り返りを経て、開発関係者の定性的な意見を収集した。定量的なデータの分析と定性的な感想から、アジャイル開発の導入によって、オフショア側のチームの一体感及び、人員の定着率が向上し、生産性と品質の安定化などの効果もたらされた。また、課題についても顕在化してきた。

今後の取り組みとして、1)オフショア開発とアジャイル開発のプロセスをSOTの開発標準に盛り込み、また、2)当社の要求を満たすための開発以外に、当社の顧客の要求を満たすための開発へのアジャイル開発の導入を予定している。

※1 独立行政法人 情報処理推進機構、『IT人材白書2011』

※2 VersionOne, 2010 State of Agile Development Survey Results

※3 オブジェクト広場 2011年9月、『OGIS Scalable Agile Method の真髄』

F4b

7月25日

14：10～14：55

会議室B